

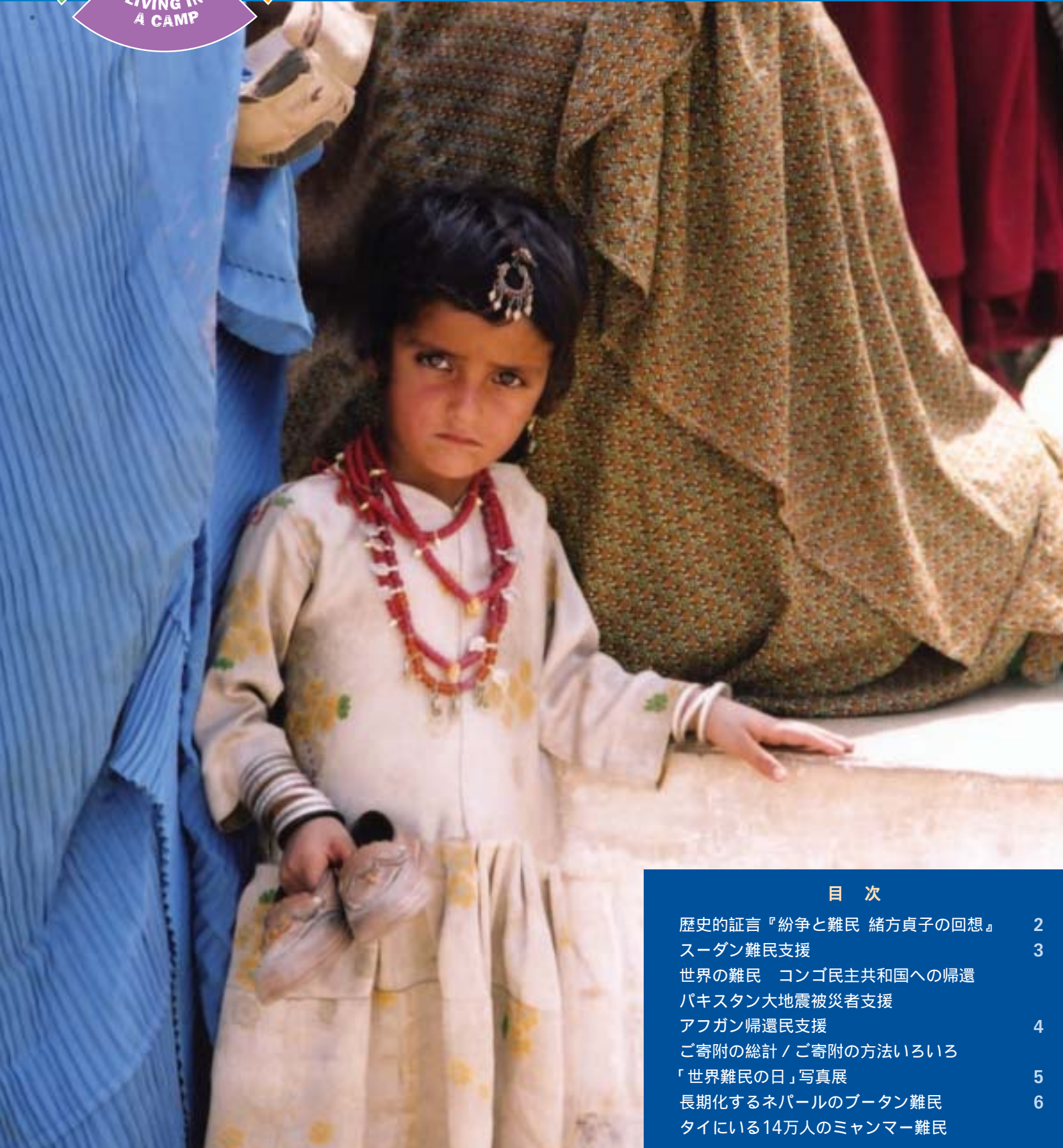


With you

ウィズユー

日本UNHCR協会ニュースレター

No.9 2006年 第2号



目次

歴史的証言『紛争と難民 緒方貞子の回想』	2
スーダン難民支援	3
世界の難民 コンゴ民主共和国への帰還	
パキスタン大地震被災者支援	
アフガン帰還民支援	4
ご寄附の総計 / ご寄附の方法いろいろ	
「世界難民の日」写真展	5
長期化するネパールのブータン難民	6
タイにいる14万人のミャンマー難民	

日本UNHCR協会はUNHCR
(国連難民高等弁務官事務所)の公式支援窓口です。

JAPAN FOR UNHCR
The UN Refugee Agency

歴史的証言 『紛争と難民 緒方貞子の回想』



1991年から2000年までの10年間、国連難民高等弁務官として人道援助の最前線に立ち続けた緒方貞子さんは、退任後ニューヨークに居を移し、回想録の執筆にとりかかりました。現在は、独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長として、頻繁に海外に出かける日々を過ごされています。回想録の出版に合わせて、お話をお聞きしました。

『紛争と難民 緒方貞子の回想』
（集英社刊 定価3,150円）

◎ この回想録の執筆動機をお教えてください。

A. 国連難民高等弁務官を務めた10年間はきちんと書き残しておきたいという強い思いがありました。人道援助を外から見ていたジャーナリストやNGOの人による叙述はありますが、なぜそのような行動をとったのかを記す当事者側からの発言はなかったからです。本書は私が対応したすべての重要な危機状況を取り上げたものではありません。難民に関する読者の理解を深めていただくために、いくつかの事例を選んで関連する事実の検証と分析を試みることにしました。クルド難民、ボスニア紛争、アフリカ大湖地域の危機、アフガン難民の4つの事例は、その規模、難民の危機的状況、関連する利害、動員されたパートナーの多様性において、検討に値するものだと考えました。

◎ すでに英語版が出版されているとお聞きしましたが。

A. 原本は英語で執筆しています。人道活動という仕事の世界を舞台にしたものであり、その仕事を最も多くの人々に伝え理解してもらうためには、英語が一番ふさわしいと考えたからです。



4月5日、出版記念レセプションにて緒方さんを挟んで日本UNHCR協会の榎川事務局長（左）と赤野副代表理事（右）

その上、高等弁務官を退任した後、フォード財団の招聘を受けて2001年からニューヨークで回顧録の執筆に取り掛かることができました。ようやく2005年春に、ニューヨークとロンドンのノートン社から『THE TURBULENT DECADE: Confronting the Refugee Crises of the 1990s』が刊行されました。今回出版した回想録は、この英語版がもとになっています。

◎ 難民問題の解決への道筋はどのようなものだったのでしょうか？

A. 現場において、実態をよく理解し、関係する人々の期待と関心をよく把握したうえで、相手国政府や援助を必要とする政府と交渉しました。現場を知ったうえで、最終的には難民の命を救うことが必要です。さらに、少しでも状況を良くするにはどうすればよいか工夫を重ねるわけです。どんなに状況が絶望的であっても、^{ユネスコ/イスタンブール}UNHCRがうまく仕事を進めれば、事態は少しは良くなる、そういう信念があったと思います。それしか問題解決の道はなかったのですから。本来、難民問題は政治的な要因に基づくものですから、政治的な解決が必要なのです。人道活動は、問題解決に至るまでのギャップを埋める役割を担わされたのです。

◎ 国連難民高等弁務官としての10年間で、今、どのように感じていらっしゃいますか？

A. 仕事として、あの10年はとても充実したものでした。張り切っていきいきと暮らしていたと感じます。困難な幾つもの問題を前にして、大変なフラストレーションもありましたが、その分、理解し合える味方が増えていく嬉しさも味わいました。当時、一緒に仕事をしていただいていた人たちとの間に

は、友情とすごい団結心があったと思います。この人たちはまさに戦友であり、生涯の友だと感じます。高等弁務官補として私たちを支えてくれたセルジオ・ピエラ・デメロを2003年8月にバクダッドのテロで失ったことは痛恨の極みです。

◎ 日本人は諸外国や難民問題への関心が薄いといわれますが、どう思われますか？

A. 確かに今の日本が内向きになっているのは事実でしょう。でも、希望はあると思っています。現在、理事長を務めているJICAには、海外で働きたいという意欲的な若者が大勢来ますし、協力隊やシニアボランティアへの参加希望者も増えています。海外旅行から始めてもいいので、さまざまな国や地域の文化や歴史に関心を向けてほしいですね。日本だけが平和でいられる時代ではありません。世界は相互依存で成り立っているのですから、遠い国の出来事であっても、それが自分たちに影響するという意識することが大切です。

◎ このニュースレター読者の皆さんへのメッセージをお願いします。

A. 私の在任中から多くの方々がボランティアとしてUNHCRの活動を支援してくれました。そのような有志の方々の力で日本UNHCR協会が設立・運営され、多くの個人、団体、企業などが、それぞれの立場から難民支援に関わってくださっていることを知り、大変心強く感じます。人間が生きるうえで一番大切なことは、人生という与えられた時間の中で、自分を十分に活かして生きていくことだと思います。誰もがそんな人生を送れるように、どこかで苦しんでいる人がいることを忘れずに、みんなが地球に共に生きる人間どうしの連帯感を持ってほしいと願っています。

スーダン難民支援

治安悪化するチャド / スーダン国境地帯

2005年末頃より、スーダンのダルフル地方だけではなく、国境のチャド側でも民兵による襲撃が発生するようになりました。2006年4月10日にも、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)が1万7700人のスーダン難民を保護しているゴズアメル・キャンプに武装集団が現れました(ゴズアメルは国境から95キロ離れています)。ちょうど食糧を支給している時間でした。この日、UNHCRをはじめ各援助団体の職員はキャンプから宿舎へ帰ることができませんでした。約1万6000人が避難しているアムナ

バック・キャンプは国境から27キロしか離れていません。治安の問題に加えて、深刻な水不足のため、現在、移転が進められています。4月末に3000人をミレ・キャンプに、残りを今後建設される新しいキャンプ(設営地未定)に移す予定にしています。UNHCRとチャド政府は、チャド警察官の訓練も含め、治安回復に努力することに同意しました。

*2006年になってチャドとスーダンの関係が悪化し、4月14日にはチャド政府がスーダンとの外交関係断行を発表しました。チャド東部のスーダン難民約20万人の今後の状況が心配されます。

スーダン南部の悲劇

ダルフルの人道危機とは別に、スーダン南部では、21年続いた南北内戦後の



スーダン南部の町イエイ UNHCR/Y.Moriya

帰還の準備が進められています。しかし、2006年3月15日、イエイにあるUNHCR事務所が武装した二人組に襲撃される事件があり、イエイへの帰還は先送りになっています。この襲撃で重症を負ったナビル・アブドゥラ職員が28日に亡くなりました。このような残忍な行為を防止するためにも、国際社会の支援が必要です。

スーダン難民支援

ご支援ありがとうございました。
ご寄附：714万5649円 件数：259件
(2006年1月1日～3月31日)

*チャドのスーダン難民、ダルフルの国内避難民、スーダン南部の帰還民支援

世界の難民

コンゴ民主共和国への帰還



1960年の独立後、政情不安が続いたコンゴ民主共和国(旧ザイル)では、1990年代にも大きな内乱があり、その間、約300万人が命を落としたと言われています。多くの人々が故郷を追われ、現在もまだ42万人が難民として周辺国に残り、160万人が国内避難民となっています。

2002年12月のプレトリア包括合意を経て、帰還の目処が立ち、2004年から、小規模ながら自主帰還が始まりました。まだ帰還できない州もありますが、2005年は南キブ州、赤道州、キンシャサ等に計4万5000人が故郷に戻りました。UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は2006年に約12万人の帰還を支援する計画です。

UNHCRはコンゴ難民の帰還支援の一環として、「サバイバルキット」を支給しています。これは1セット約3000円(1家族3.5人を想定)です。その他にも3ヵ月分の食糧や破壊された住宅の再建に必要な工具や資材も提供しています。



タンザニアから湖を渡って帰還したコンゴ難民 UNHCR/N.Takagi

サバイバルキットの例(円)

炊事道具	1,200
丈夫なビニールシート	640
敷布	170
毛布	370
水汲み容器(10ℓ)	170
蚊帳	480

パキスタン大地震被災者支援 たくさんのご支援ありがとうございました。

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)はパキスタンで約25年にわたり、主にアフガン難民の援助活動を行ってきたため、2005年10月8日の地震発生直後から、被災者の救援活動を始めました。家屋が崩壊し、避難せざるを得なかった人々に、UNHCRは世界各地の備蓄倉庫から緊急輸送された救援物資(毛布、テント、ビニールシート、水汲み容器、調理道具

セットなど)と、冷え込みの厳しい地域では、石油ストーブを支給しました。

地震発生後、半年が経ち、約8万人の人々がまだ避難している一方で、約7万人が地元に戻り、約30のキャンプが役割を終えました。UNHCRはキャンプの跡地の原状回復にも努めています。

UNHCRが地震被災者支援に必要としていた3000万米ドル(約35億円)は、

被災者キャンプの青空教室 UNHCR/M.Cierna



皆様からのご寄附と各国政府からの拠出金により、ほぼ確保されました。皆様の迅速かつ温かいご支援にあらためて感謝申し上げます。

パキスタン大地震被災者支援

ご支援ありがとうございました。
ご寄附：5908万9174円 件数：3244件
(2005年10月8日～2006年3月31日)

アフガン帰還民支援



アフガンistanに向かうバス。この少女は生まれて初めて祖国を見つめられる。 UNHCR/P. Kessler

アフガンistanは自然環境が厳しいため、冬の間、アフガン難民がイランやパキスタンから故郷を目指す帰還事業が一時的に中断されます。しかし、3月になって温かくなると、再び帰還事業が活発になります。2006年は、3月の1ヵ月間で、すでに約9000人がパキスタンからアフガンistanに向けて出発しました。難民キャンプから故郷への帰還を決断す

るにあたって、アフガン難民の人々は、住む家があるか、子どもが教育を受けられるか、仕事があるかを重視するようです。UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は内乱で破壊された住宅や学校の再建、職業訓練なども支援しています。

日本の皆様には、帰還事業が本格的にスタートした2002年以降、特に住宅再建に大きなご支援をいただいています。

UNHCRの支援で帰還したアフガン難民の数(人)

帰還した地域	2002	2003	2004	2005	計
北	407,768	105,315	185,103	101,105	799,291
東	378,623	91,085	69,835	90,254	629,797
中央	830,918	160,781	261,392	157,203	1,410,294
南東	28,968	39,727	68,200	104,957	241,852
南	102,659	33,866	92,891	26,342	255,758
西	75,951	43,624	83,014	33,089	235,678
計	1,824,887	474,398	760,435	512,950	3,572,670

アフガンistanで再建された住宅数(戸)

再建された地域	2002	2003	2004	2005	計
北	7,797	9,529	5,000	6,830	29,156
東	9,113	6,723	3,900	2,393	22,129
中央	12,757	16,339	6,538	8,103	43,737
パーミヤン	—	—	800	800	1,600
南東	1,500	4,648	2,895	1,234	10,277
南	1,400	4,459	2,344	1,514	9,717
西	7,292	9,587	5,000	2,196	24,075
計	39,859	51,285	26,477	23,070	140,691

このプロジェクトは、UNHCRが住居を建設し、単に帰還民が入居するのではなく、帰還民自らがUNHCR支給の建材・工具を使って再建作業にあたります。地元コミュニティがもっとも支援を必要とする家族を選び、UNHCRや協力NGOが技術指導を行います。自分で再建作業ができない人々は地域の人々が手を貸してくれます。この住宅の再建作業を通じて、混乱の後の故郷で、地元コミュニティでの信頼関係も再建されることを願っています。

2006年は60万5000人がイランやパキスタンから帰還すると想定し、UNHCRは1万9000戸の住宅再建を支援する予定です。その費用に1120万米ドル(約12億8000万円)を必要としています。

アフガン帰還民支援(住宅再建)
ご支援ありがとうございました。
ご寄附: 13万1000円 件数: 22件
(2006年1月1日~3月31日)

ご寄附の総計 (2006年1月1日~3月31日) ご支援ありがとうございました。

各記事にある援助プログラムをご指定いただくご寄附の他に、UNHCR本部が必要と判断する援助プログラムに適宜充当させていただく「最優先(指定なし)」

へも多くのご寄附をいただいています。「最優先」は、インド洋大津波やパキスタン大地震などの緊急事態に充当する場合もあれば、長期化した難民問題で国際社会の関心が離れてしまい、必要とされる資金がなかなか確保されない援助プロ

グラムに充当されることもあります。「毎月倶楽部」の皆様からのご寄附も「最優先」とさせていただきます。

ご寄附: 6670万5076円
件数: 4691件
(各種のご指定、最優先、その他のご寄附も含む)

ご寄附の方法いろいろ

日本UNHCR協会は UNHCRの公式支援窓口です。

UNHCR協会では、以下の方法で常時ご寄附をお受けしています。皆様のご寄附は寄附金控除の対象となります。

毎月倶楽部

毎月の自動引き落としによるご寄附です。長期的に安定した援助活動のために、毎月倶楽部による継続的なご支援もご検討ください。ご関心のある方はご連絡ください。資料をお送りします。

郵便局

(振込手数料はUNHCR協会がお支払いす

る「加入者負担」です)

郵便振替口座: 00140-6-569575

加入者名: UNHCR協会

(「HCR協会」とプリントされた古い振込用紙も引き続きご利用いただけます)

インターネット/クレジットカード

ホームページでお申し込み後、郵便局やコンビニでお振り込みいただける用紙がお手元に届きます。あるいは銀行振込やクレジットカードでも可能です。

www.japanforunhcr.org/gokifu.html

銀行

三菱東京UFJ銀行 青山支店

普通口座 5251034

三井住友銀行 渋谷駅前支店

普通口座 3478195

口座名(・共通): UNHCRキョウカイ
銀行からのお振り込みはお名前の一部しか表示されません。手続きの際、登録IDをお持ちの方は依頼人欄にID番号・お名前の順にご入力ください。

登録IDをお持ちでない方あるいはわからない方は、受領証やニュースレター発送のため、お名前・住所・電話番号をご連絡ください。

遺贈および相続財産のご寄附
遺贈や相続財産のご寄附をお考えの方は当協会にご相談ください。パンフレットをお送りします。

「世界難民の日」写真展

World Refugee Day Photo Exhibition 2006

6月20日は「世界難民の日」です。

ユ・エヌ・エイチ・シー・アール

UNHCR(国連難民高等弁務官)駐日事務所と日本UNHCR協会では、「世界難民の日」をはさんだ約1ヵ月間、UNハウス(国連大学ビル)ギャラリーにて、写真展を開催いたします。今年で6回目の開催となる「世界難民の日」のテーマは「希望(Hope)」。世界各地の難民キャンプで育つ子どもたちに、日本人々から運ばれた希望……「ワンダーアイズプロジェクト」、「ピースバックプロジェクト」、「眼鏡寄贈ミッション」をご紹介します。

開催期間: 2006年6月19日(月)~7月14日(金) 10:00~18:00 / 入場無料

休館日: 6月24日(土)を除く土・日曜日

*6月24日(土)には3階国際会議場にて「世界難民の日」フォーラム開催が予定されています。



©WONDER EYES PROJECT

見た後、初めてカメラを手に、思いのままに喜々としてシャッターを押していた。学校や授業風景、市場や人々の暮らし…。日本人にはほとんど知られていないダダブ難民キャンプの世界が子どもたちの自然なまなざしで写し出された。

6月「世界難民の日」写真展で、この子どもたちが写した写真を展示する。いつまで難民生活が続くのか、先が見えない日々の中で写された笑顔とともに、みなで希望を見出したい。

<http://www.wondereyes.org>

寄稿: 永武ひかる /

写真家・ワンダーアイズプロジェクト代表

*「世界難民の日」写真展のほか、ワンダーアイズ写真展「For a Life ~ アフリカ難民キャンプの子どもたちが写した世界」開催: 6月20日(火)~30日(金)コニカミノルタプラザ、7月1日(月)~8月11日(金)共同通信社本社ビル・ギャラリーウオーク

ワンダーアイズプロジェクト

2006年1~2月、初めて難民キャンプを訪れた。ソマリアとの国境近いケニアの難民キャンプ・ダダブ。2005年、日本UNHCR協会ボランティア制作の絵本とワンダーアイズの本が同じ出版社から出版されたことなどが縁となって、難民キャンプでワンダーアイズ写真プログラムを行うことになったからだ。ワンダーアイズは、世界の子どもたちがカメラを手に撮影、彼らが写した写真を通して、その現状を伝える非営利のプロジェクト。今まで世界7地域で行ってきたが、

難民キャンプでこのプロジェクトを行うのは初めてだ。

熱い日差しと砂埃が風に舞う半砂漠地。できてから15年のダダブの人口は約13万人、その大半は内戦から逃れてきたソマリア人という。スーダン、エチオピア、コンゴからの難民もいる。子どもたちは予想以上に元気で明るい。現地の学校18校に通う子どもたちと、学校に通えない子どもたち、6歳から17歳まで、合計170名が写真プログラムに参加した。日本の中学生が写した日本の学校生活の写真を

ピースバックプロジェクト

~ミャンマー難民の子どもたちとともに~

2006年3月11日~18日、タイの西側のミャンマー国境にある、2つの難民キャンプをガールスカウト日本連盟の20代の会員7人が日本の子どもたちからの「心のおくりもの」を届けるために訪問しました。当連盟がミャンマー難民キャンプへ送る、第1回目の派遣団です。

日本の子どもから難民の子どもへの友情のおくりものである『ピースバック』は、手作りの巾着袋に文房具を入れます。日本では簡単に手に入れられる文房具ですが、自由に手に入れられない難民の子どもたちのために、家にある新品のものや、購入するための資金を調達しました。『ピースバック』をつめるとき、受け取った子どもの笑顔を想像し、想いを込めてメッセージも書きました。こうして日本全国から集められた約1万7000人分もの

『ピースバック』は、難民キャンプで暮らす子どもたちへ贈られました。

派遣団の訪問時間は短い時間でしたが、同年代の青年たちの助けも得て、『ピースバック』の配布や、子どもたちとのレクリエーションプログラムを無事終了することができました。また、派遣団のメンバーと同じ年代の女性との交流も行いました。キャンプの人たちからは、伝統舞踊や、歌のプレゼントがありました。

7人の派遣団は「難民という名前の人はいないのだ」「平和な世界を作るためには、小さなことでもコツコツと実行していくことが大切だ」と気づく等、大きく成長して帰ってきました。そして、日本人たちに、自分たちが感じたこと、そして自分たちができることを呼びかけ



久保田弘信撮影

るために、ピースバックプロジェクトの推進に携わっています。

私たちは、2008年3月までこのプロジェクトを続けます。皆さんも共に世界の平和のために行動してみませんか。会員でない方も、この活動に参加してください。行動に移してみようと思われた方は、下記へご連絡ください。

Tel 03-3460-0701 Fax 03-3460-8383

<http://www.girlscout.or.jp>

寄稿: ガールスカウト日本連盟

眼鏡寄贈ミッション

株式会社富士メガネはUNHCRの民間企業パートナーとして、1983から93年タイ・インドシナ難民キャンプ、1994年から

ネパール・ブータン難民キャンプ、1997年からアルメニア・アゼルバイジャン難民に対して、ヴィジョンスクリーニング眼鏡寄

贈活動を続けています。プロジェクト・チームが毎回現地を訪問し、視力の検査や現地スタッフの教育など、難民の自立支援を目的として、活動を展開しています。

<http://www.fujimegane.co.jp>

学校で難民問題を勉強しませんか? 日本UNHCR協会は、子どもたちにも難民問題を知って欲しいと願っています。ぜひ「総合学習の時間」などで取り上げていただき、子どもたちが故郷を追われた人々のことを知り、同じ地球人として何ができるかを一緒に考えていただければ幸いです。参考資料をお送りしたり、講師派遣も可能です。どうぞお問い合わせください。03-3499-2450 school@japanforunhcr.org

長期化するネパールの ブータン難民



ブータン難民が生まれた背景

日本ではあまり知られていませんが、1990年代初頭に、民主化運動や民族主義政策により、ブータンから逃れてきたネパール系ブータン難民約10万6000人が、ネパール南東部の7つのキャンプに避難し生活しています。

19世紀後半から20世紀初めに、経済的な理由から多くの人々がネパールからブータン南部に移住しました。しかし、低地に住むネパール系の人々は、ネパール語を話しヒンズー教徒中心であるのに対し、中高地に住む主流派ブータン人は、チベット系の仏教徒です。そもそも民族的にも宗教的にも異なります。

1980年代末から1990年代初頭に、ブータン政府によるネパール系の人々の国籍剥奪や民主化要求をめぐる対立などから大量の人々がネパールに避難しました。この結果、ネパール政府の要請を受けて、ユースエイチシー・フル UNHCR が政府を支援する形でブータン

難民の保護と物的支援に携わるようになりました。

2006年2月より、7つの難民キャンプを管轄しているUNHCRネパール・ダマク事務所に所長として赴任している根本かおるさんに、キャンプの現在の様子についてお聞きしました。

難民キャンプに明かりを

難民たちの住むキャンプには、そもそも電気が通っていません。昨年未まではかなりの量の灯油を配布していたので、夜でも明かりをとることができたのですが、灯油の値が高騰し、今では家族あたり月1リットルしか配っていません。その結果、夜、明かりがないため子どもたちが家で勉強できなくなった上、暗闇に難民たちが身の危険を感じ始めました。難民となった子どもたちにとって教育はしばしば心の安定剤の役割を果たしますが、勉強の機会を奪われた子どもたちはますますフラストレーションを募らせています。

唯一の太陽光発電パネルが難民キャンプ内の診療所で大活躍しています。夜の急患への対応には、以前は灯油をともしていたのですが、今では太陽光パネルの電気が明かりをともしてくれます。灯油の明かりよりも明るいので治療や分娩補



「難民キャンプ内の診療所と太陽光発電パネル」
©UNHCR/S.Doraiswamy

助をするにも助かると医療スタッフたちは喜んでいますが。難民キャンプの診療所は周囲に住む地元住民たちにも開放されているので、彼らも恩恵に浴しています。

キャンプ内の安全のためにも、子どもたちが夜集まって勉強する場所を提供するためにも、太陽光発電パネルをもっと設置することができれば、かなり助かるだろうと思います。

(参考：太陽光発電パネルを現地調達した場合、1基約400米ドル=約4万6000円)

今日の希望、明日への希望

難民の約半数が女性です。女手ひとつで家族を支えているケースや、老夫婦、障害者を抱えた家族など、援助物資の削減が大きく影響する層もあります。5～10万円という額で測り知れない効果がある支援が実施できるのですが、緊縮財政のためにそれができなくなっているのが現状です。

将来の故郷への帰還を含め将来の解決に向けて、職業訓練の実施は難民となった人たちの明日への希望につながります。女性には洋裁や刺繍、機織りなど、男性には鍛冶や自転車修理などの職業訓練が実施されていますが、まだごく一部の人たちしか受けられていません。今後支援を強化していきたい分野のひとつです。

*ご支援は「ブータン難民」とご指定ください。

昨年、タイ政府はミャンマー難民の第三国への定住を認めるようになりましたが、多くの難民にとっては、祖国ミャンマーにいつ帰れるのか見通しのない状況がまだまだ続きます。

多くの日本人が訪問するタイに、14万人のミャンマー難民が困難な状況にあるということを日本の人々に知っていただき、難民の人々の苦難を和らげ、将来への希望をもって生きていけるよう皆様からのご支援をお願い申し上げます。

*ご支援は「ミャンマー難民」とご指定ください。

タイにいる14万人のミャンマー難民

子どもたちに希望を!

ミャンマーにおけるビルマ族とカレン族などとの紛争が、1949年以来57年間続いており、1984年にミャンマー難民がタイに流入し22年になります。タイ国内のミャンマーとの国境近くにある9カ所の難民キャンプに約14万人の人々が、山の斜面に沿った厳しい立地条件の中、竹で作られた高床式の家が軒を連ねて懸命に生きています。現在も多くの難民が流入しており、水の確保・衛生状況は厳しくなっています。ユースエイチシー・フル UNHCR は、タイ政府、キャンプ委員会、NGOと協力して、食糧、水、衛生・医療、教育、安全など難民の保護と援助をしています。難民の人々は、

キャンプの外へ出ることも仕事をする自由もありません。

紛争を逃れてキャンプにたどりついた子どもたち、キャンプで生まれた子どもたちが、キャンプだけの世界で生活しています。自由のないキャンプの子どもたちは、知識に飢えており、教室や教材、先生が不足しているものの学ぶ意欲に溢れています。中学生に将来の夢を聞くと、女子は教師や看護婦、男子はサッカー選手、ミュージシャン、コンピュータ技術者と答え、「いつか故国に戻り、ここで学んだことを活かしたい」と、将来への夢や希望となる「教育」の必要性を口々に訴えていました。

認定NPO法人 日本UNHCR協会
[国連難民高等弁務官事務所(UNHCR) 国内委員会]
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70
国連大学ビル(UNハウス)6F
TEL: 03-3499-2450 FAX: 03-3499-2273
Eメール: info@japanforunhcr.org
ホームページ: <http://www.japanforunhcr.org>

「With you」No.9 2006年 第2号(6月)
発行人: 赤野間征盛
編集: 榎川勝也、中村恵、井上清治、山崎玲子
デザイン・製作: 榎ポイントライン